

Tama Art University

Oil Painting 2026



Tama Art
University
Oil Painting
2026

油画専攻とは

多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻は、日本の現代美術の歴史を幾つも作ってきた学び舎です。学生一人一人が自身の表現とまっすぐ向き合う学風、そしてそれを実現する環境がここにはあります。

学生は教員や研究室スタッフとともに、自立した表現者として物を作る喜びの果てしない道を歩んでいます。こうした自由闊達で幅広い表現活動を実現するため、技術的な基礎訓練はもちろん、人間がどのように空間や時間を捉えて来たか、そして拡張された現代のさまざまなメディアの中の無数の表現方法、美についての幾つもの思想を学びます。

パフォーマンス、映像、陶芸、樹脂、テンペラ、銅版画、日本画、下地研究と、多様な技法講座に加え、様々なジャンルの表現者による特別講義、PBL授業、海外の提携校との交換留学が用意されています。仲間たちとの日々の制作と展示発表、多くの講評会、研修旅行を通じての教員や助手との語らいなど、表現者として生きるとはどういうことか、そしていま表現せざるを得ない対象は何かを各々が見出していきます。

ここで培った大切な時間は、卒業後のそれぞれの目標、叶えたい夢、突き進みたい表現の領野へと繋がっています。ある者は教育者として生徒たちと真摯に向き合い、ある者はデザインをはじめとするクリエイティブな仕事へ、そして大学院進学や留学を選ぶ者も大勢います。

それぞれの方法で新たな時代を切り拓くアーティストとして世界に羽ばたいて行きます。





多摩帝国美術学校が創立した1935年、牧野虎雄主任教授のもと西洋画科が開設されました。「多摩美油画」のはじまりです。その後大戦を挟み、専門学校、短大を経て、1953年に多摩美術大学絵画科油画が4年制大学として発足しました。教授陣に中村研一、林武、川端実、岡田謙三、鈴木信太郎、鈴木誠、宮本三郎、末松正樹、大沢昌助ら第一線で活躍する作家が集結し、現在にいたる多摩美の油画教育の礎となりました。当時の校友会誌「多摩美術」第3号の中村研一による巻頭言には、「朝どんなに早く来ても、夕方どんなにおそくまで居ても何とも苦情をいふ人は無い。勉強する人にこれより寛大な学校は無い。私学の良さがそこにある。なまけ者は来ないがよい。皆が火の弾になって向上する所である。」と書かれています。自由でリベラルな学科のカラーはすでにこの頃から始まっていました。その後、福沢一郎、駒井哲郎なども加わり、1965年の斎藤義重、そして68年高松次郎の着任によって「現代美術の多摩美」が美術界に印象付けられていきました。そのことをもっとも顕著に表しているのが「もの派」と呼ばれた作家たちの活躍

です。関根伸夫、菅木志雄、吉田克朗、本田真吾ら「もの派」の中心的メンバーは、すべて斎藤義重教室の卒業生です。特に斎藤教室の助手となった関根伸夫によって1968年に発表された「位相-大地」や、1970年の「空相」は、日本現代美術の大きな転換点として、また世界の美術をリードする作品として多くの作家に影響を与えました。その後「もの派」の理論的支柱であった李禹煥が客員教授に就任、さらに若林奮、辰野登恵子、堀浩哉なども教授として迎えられ「現代美術の多摩美」をリードする油画専攻は日本の美術大学で最もアクチュアルな研究室となっていったのです。「現代美術の多摩美」その伝統は現在も生き続け、絵画はもちろんのこと、メディアやジャンルを横断する自由な表現を支えるため、研究室はさまざまな領域で表現活動をする教授や講師、助手らによって構成されています。そして、「今」という時代に即応する自由でリベラルな学科のカラーが息づいています。

絵画学科 油画専攻 教授 小泉俊己



菅木志雄 常盤公園 東京 1977年8月20日



斎藤義重「斎藤義重展」アネリージュ・ギャラリー
ロンドン イギリス 1992年5月27日



菅木志雄 常盤公園 東京 1974年1月



李禹煥「李禹煥展」ビナール画廊 東京 1971年1月11日



斎藤義重 名古屋 1975年3月7日



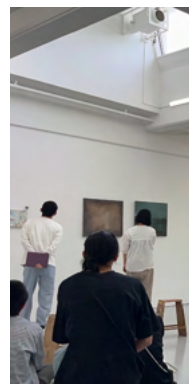
関根伸夫 志木市庁舎前 埼玉 1972年6月12日



写真撮影：堀 龍太／「現在、多摩美術大学 八王子キャンパス正門前に設置されている「空相」(関根伸夫・2003年)」

教育課程

4年間を通じて、自由な創作活動を支える根源的な力を身につけるため、1年次では、対象への観察力と描写、2年次からはクラスごとに分かれ、複数の異なる課題に取り組みながら、独自の表現を探究します。さらに、課題提出ごとに開催される批評会を通じて、制作についての考えを言葉で他者に伝える力も養います。3年次以降は、自らで着想した主題や動機を作品にしていくための制作研究に取り組みます。どのクラスを選択しても個々の自由な表現を尊重し、双方向的な指導を行いながら、自立した表現者としての自覚を促します。また、学内ギャラリー展示などの発表の場を通じて、広く社会に向けて作品を発表する力を培います。



1年次

課題を通して絵画、
造形表現の基礎を身につける。

実技1

共通の課題制作と、課題毎に行われるその背景となる理論や知識の講義を通し、実技と理論の両面から造形表現の基礎を学び、徐々に表現の幅を拡張していきます。

共通基礎課題

2年次

表現力や技術を身につけながら、
自分が求める制作の方向性を探っていく。

実技2

複数の教員からなるクラスに分かれ、それぞれ異なる課題に取り組みます。2年次以降は、学年が上がるごとにクラスを新たに選択します。

クラスの選択

専任教員2名／非常勤講師1～2名
学生(各学年)22名程度

Aクラス

Bクラス

Cクラス

Dクラス

Eクラス

Fクラス





3年次

自ら着想した表現を、
より深く追求していく。

実技3

各研究室毎の指導体制のもと、教員と学生との双方向的なやりとりを通して、広い視野を身につけていきます。
クラスごとにホール展示を行います。

クラスの選択

専任教員2名／非常勤講師1～2名
学生(各学年)22名程度

Aクラス

Bクラス

Cクラス

Dクラス

Eクラス

Fクラス

4年次

多角的な視点からの指導を受けながら
独自の表現を作り上げていく。

実技4

卒業制作に向け、講評や面談をしながら、自らの目標に沿った制作に取り組み、卒業制作展を行います。

クラスの選択

専任教員2名／非常勤講師1～2名
学生(各学年)22名程度

Aクラス

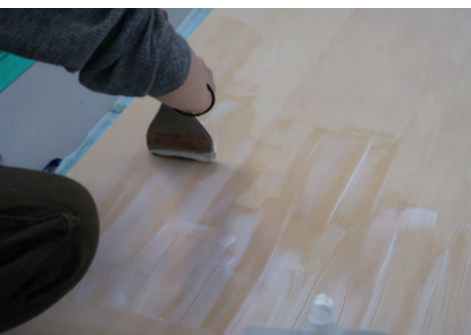
Bクラス

Cクラス

Dクラス

Eクラス

Fクラス

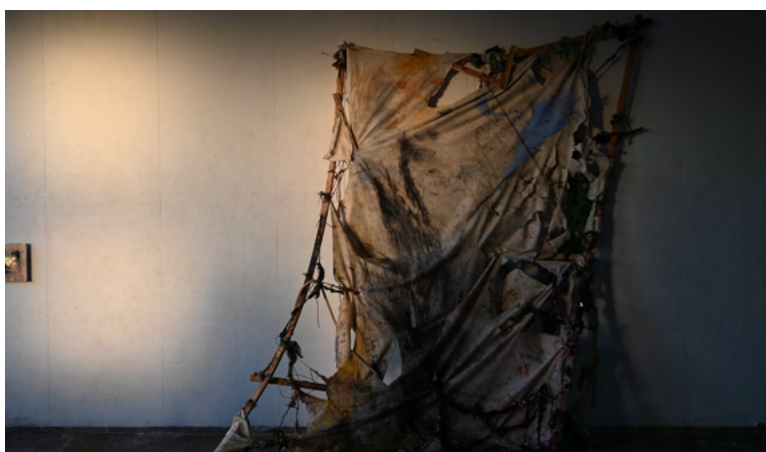


クラスの形態

クラスは6組からなり、それぞれのクラスは専任教員2名、非常勤講師1～2名、学生(各学年)22名程度により構成される。教員の構成は隔年で組みかわる。学生は、2年次以降毎年クラスを選択する。

1年

全クラスが共通の課題を行います。
前期は人物や風景などを通して対象を見ることから出発します。後期は、現代美術の始まりである抽象絵画の実践を通して、見えないものや時間表象、物とイメージなど、構造や関係の抽出を学びます。前期で学んだ現代絵画の基礎をもとに、後期は作品を成立させるためのコンセプトを学ぶユニークな課題を行います。



岸野椰子 / 「風景」 / キャンバス・油彩・紐・植物・土・金具 / 345×235cm

課題Ⅰ：「人物」

ポートレート。
特定の人物を絵、写真、映像、
立体のいずれかで表してください。

課題Ⅱ：「風景」

屋外で風景を描く。

「技法講座」

8つの講座から選択し、
基礎技法について学ぶ。
(1・2年共通)

2年

引き続き課題制作を行います。
1年で学んださまざまな表現の冒険を、各々の問題意識の中で具体的に探究し作品へ昇華させます。ユニークな課題に対し、それぞれが表現者として向き合っていくのです。2年次より、2名の専任講師と非常勤講師によるクラス体制がはじまります。より高度な内容に対応するための双方向的で細やかな教育環境です。



太田侑里花 / 「第Ⅲ課題 世界の発展」 / 廃材、木材 / 230×300cm

課題Ⅰ：「遠近法と時間」

課題Ⅱ：「火」

課題Ⅲ：「速度」

課題Ⅳ：「自由課題」

A クラス

課題Ⅰ：「1000枚ドローイング」

課題Ⅱ：「私と〇〇」

課題Ⅲ：「サイトスペシフィック」

課題Ⅳ：「自由課題」

B クラス

課題Ⅰ：「場所」をテーマに 制作しなさい。

課題Ⅱ：「大ドローイング」

課題Ⅲ：「あなたの作品と 美術史の関係」

課題Ⅳ：「記録と表現」

※課題は年によって変更します。課題文は2024年のものです。



オオクラ チセ/「人物」/壁、和紙に墨、水彩/サイズ可変(支持体130.3×80.3cm)



松瀬玄弥/「抽象」/アクリル、油彩、粘土、木くず / 116.7×91cm

課題Ⅲ：「ドローイング」

素描やデッサンとも呼ばれるこうした絵画には、油彩のような物質的強度のある絵画とは違う豊かさの中に、それぞれの表現者が持つ本質的な力の形が残される。そのようなものを目指す。

課題Ⅳ：「抽象」

前課題の「人物」「風景」から、さらに表現の拡大を目指す。基本的には絵画を中心とするが、他も可能である。抽象や他のジャンルへのチャレンジの場としてほしい。

課題Ⅴ：「観察」

作ること、表現することを考えるのではなく、まず観察することから始める。何もないと思っていたところを敢えて見る。空想や妄想をするのではなく「現実の観察」に努める。



高波 浩 / 「第Ⅳ課題 次の言葉の中から一つを選び、それをタイトルとする作品を制作する。」/キャンバスに油彩、油性マーカー、紙、養生テープ / 60,6×72,7cm



中村小百合/「第Ⅲ課題 あなたの作品と美術史との関係」/キャンバス、油彩/72.7×60.6cm

Cクラス

課題Ⅰ：「制作の方法を発見する」

課題Ⅱ：「果たして何を見たのか」

課題Ⅲ：「街のB面を散歩する」

課題Ⅳ：「次の言葉の中から一つ選び、それをタイトルとする作品を制作する。
敷く・曲げる・放る・回る・すてる・忘れる」

Dクラス

課題Ⅰ：「課題Ⅰ：まずは美術の年表をつくってみる」

課題Ⅱ：「100年後のセルフポートレート」

課題Ⅲ：「リサーチーあなたと美術の関係ー」

課題Ⅳ：「〇からつくる」

Eクラス

課題Ⅰ：「言葉じゃダメなこと。」

課題Ⅱ：「場と物」

課題Ⅲ：「世界の発掘」

課題Ⅳ：「あなたがしておかなければ、歴史の中に消えてしまうことを表現しなさい。」

Fクラス

3年

3年次より自由制作になり、自らの目標にそって作品制作に取り組みます。造形表現についての様々な理論や、社会に対する表現者としての問題意識など、各々の表現を追求するためのゼミも予定されています。



内田詢乃 / 「がらんどう」 / 杉 / サイズ可変



柳引孝之佑 / 「normal bean」 / キャンバスに油



阿久津陽里 / 「宙を駆ける跡」 / キャンバスに油彩 / 65.2×53cm

ホール展

油画専攻には広い吹き抜けのギャラリーがあります。大きな作品も発表できるここでの展示は、表現の冒険を試みる大切な経験になるでしょう。



ゼミ研修

3年生を対象にゼミ研修を行います。日本各地に赴き、郷土文化や自然に接し、美術作品や建造物、伝統工芸等に親しみかつ研究します。また、古美術に触れることだけでなく、先端の文化および芸術活動にも注目し、タイムリーな展覧会や美術館など日本各地に足を運びます。



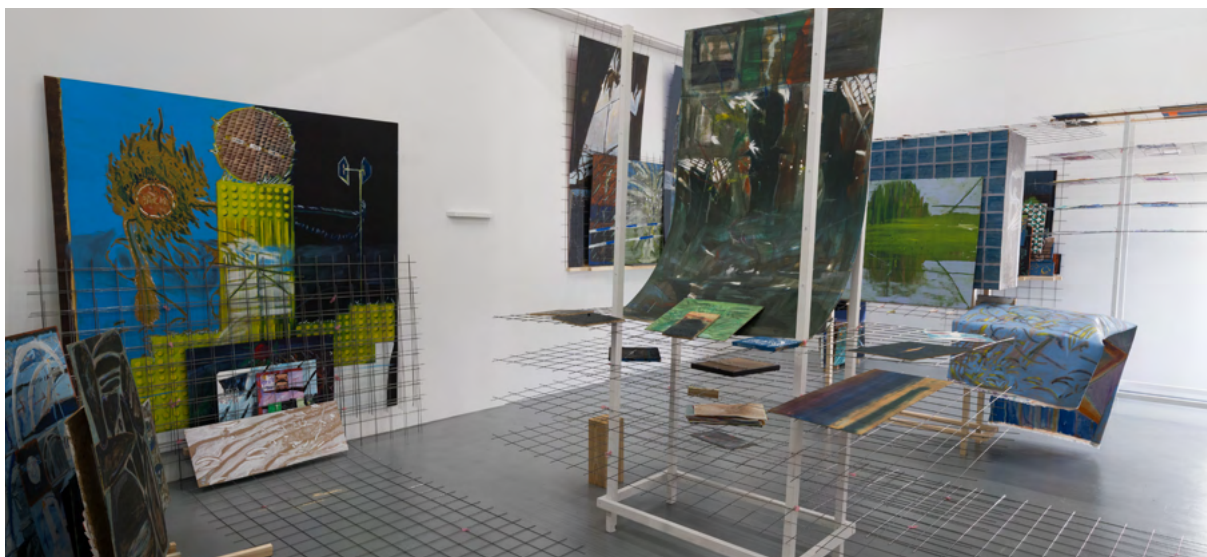
(2024年度開催)

4年

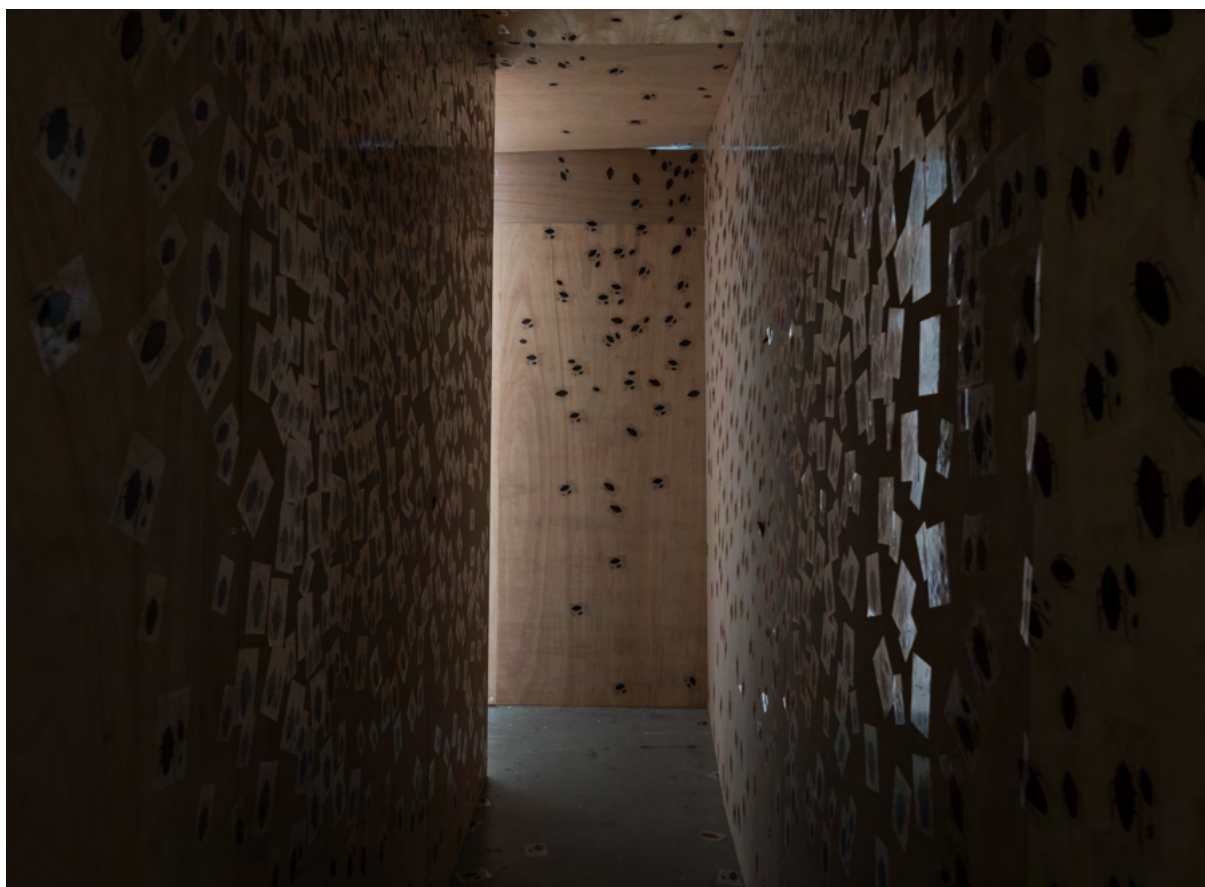
4年間の創造活動の集大成として、卒業制作の発表を行います。学内展、そして国立新美術館での五美大展の発表は、表現者として社会へ旅立つ上での大きな一歩になるでしょう。優秀作品には福沢一郎記念美術財団より福沢一郎賞が授与されます。



江島碧/「樹々の嘲笑に人々は躍る、囲いの中で」/ 油彩、綿布/291×181.8cm

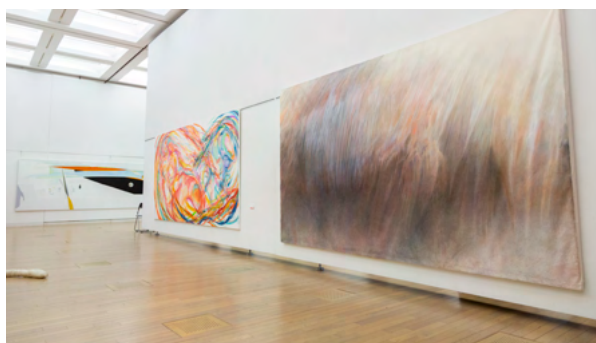
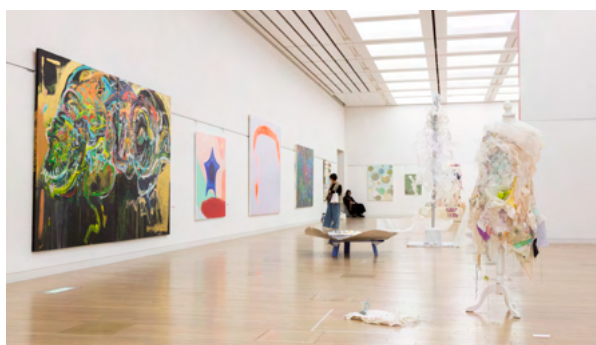


小林夏音/「cancel」/ キャンバス、板材、角材、ワイヤーメッシュ/可変



イヌミカ/「Arche」/トンネル/ 木材、透明PETシールに印刷/可変

五美大展



特別講義

さまざまなジャンルの第一線で活躍する作家、批評家、学芸員などをお招きし、特別講義を行います。また、教授による自作解説や芸用解剖学講義などもあります。今後も学生に刺激を与える講義を予定しています。



古屋兎丸氏／特別講義「多摩美の日々、卒業後の苦悩」／2023



足立智美先生／特別講義「サウンドポエトリーと現代美術 未来派・フルクサスから」／2023

ワークショップ 山本精一さん(音楽家)×山本直樹さん(漫画家)を招いて行う、ワークショップです。山本精一さんの即興で演奏されている場で、一人一枚のロール紙に向かい描いていきます。学生とともに教員も参加し、最終的に部屋全体が作品で埋まっていきます。



山本精一氏×山本直樹氏／ワークショップ／2025

技法講座

1、2年次合わせて2度の集中講座期間を設けて幅広く技法を学びます。テンペラ、樹脂、映像、パフォーマンス、陶芸、銅版画、日本画画材、下地研究の中から選択します。



2年間を通じ、学部で学んだ知識や技術にさらなる磨きをかけ、芸術や社会について幅広く考えることのできる芸術家を養成します。教員選択制による批評会を年に2回行います。2年次には修了制作にも取り組み、優秀作品には辰野登恵子賞が授与されます。

カリキュラム

絵画制作研究

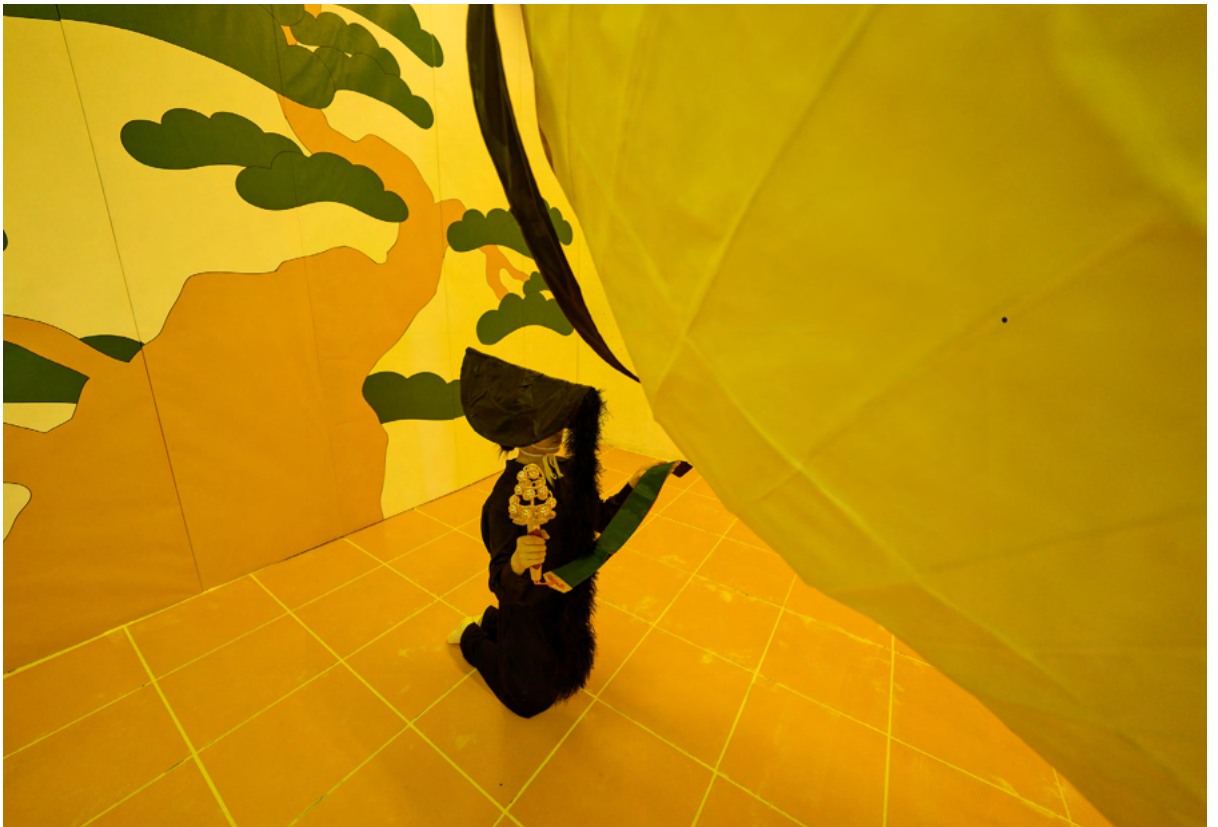
修了論文

修了制作

学外ゼミ



濱田楓 / 「ザリガニストローク」 / キャンバス、油彩 / 194×162cm



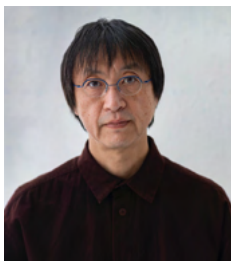
宇佐美 妃湖／「神様が殺してくれる」／ミクストメディア／可変



外波山 颯斗／「着地」／キャンバス、油彩、ビニール／可変

教員紹介

教授



石田 尚志 Ishida Takashi

作品を作ることは誰かへのプレゼントのようなものだと思う。そして、自分自身が本当に見たいものを自分のために作る行為でもある。だから表現の旅は無限だ。



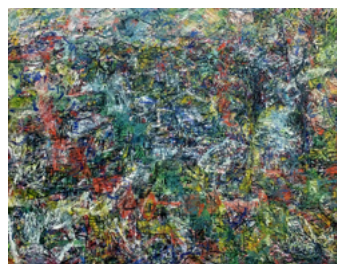
菊地 武彦 Kikuchi Takehiko

美術の中にはものの見方を変える作用が含まれています。美術と出会うことで、人生は少しだけ豊かになります。もちろんそこに至るまで多くの努力が必要でしょう。しかし続けていけば何らかのかたちで結実します。目の前がパッと開ける楽しい瞬間は、必ず訪れます。



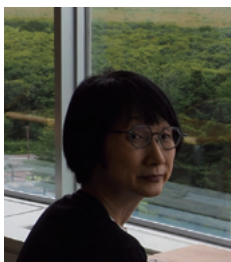
栗原 一成 Kurihara Issei

自分以外の人たちが、絵について芸術について、何を感じ、何を考えているか、興味があります。若い人たちの考えていることにも興味があります。学生の皆さんとたくさん話をしたいと思っています。



小泉 俊己 Koizumi Toshimi

メディアやジャンルにとらわれず自由な表現を認め合い、ダイナミックに世界と向き合うことが我々の使命だと思う。



高柳 恵里 Takayanagi Eri

何をどのように扱うか、様々な方法で制作を続けてきました。誰も良いとも悪いとも言ってくれないところで価値は自分で決める、ということを心がけてきたように思います。表現においては、起きてくる出来事に接して果たして自分はどう反応するのか、表面的にならずにその現実に向ってもらいたいと思います。





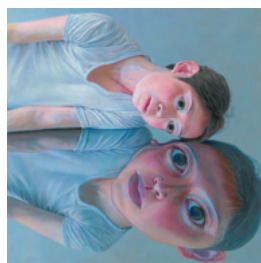
日高 理恵子 Hidaka Rieko

「生涯をとおして続けられることはなんだろう？」この高校生の時の問いが始まりでした。次第に絵を描くことを通して考え、想像するようになりました。この考える力、想像する力、この力そのものに向き合うことを、私はまさに美大というこの場で知ることができました！



日野 之彦 Hino Korehiko

大学生のときモデルを描く授業に没頭して、それ以来授業がなくても人を描くようになって今にいたります。人間の姿は日常で目にしていますが、描いているときは普段とちがった存在感を感じることができます。



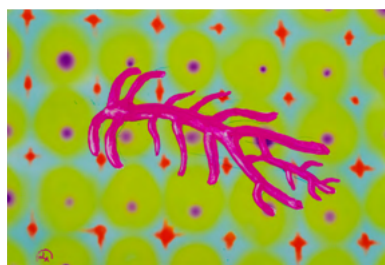
村瀬 恭子 Murase Kyoko

絵画棟の裏山で頭を揺らす竹、空に新芽を伸ばす青松の輝き、瑞々しい風が私に吹きそよぐ。この広大な環境で想像力を解放する学生たちとの出会いがある、その時間の密度が宝ものになって欲しい。



吉澤 美香 Yoshizawa Mika

自分では作り得ないものや現実には存在しないものでも、絵に描いてしまえばなんでも出現させることができるのが絵のいいところ！



准教授



雨宮 庸介 Amemiya Yousuke

大学に入学したのもずいぶん昔になりましたが、いまだに自分を「伸びざかり」と感じて「伸びしろ」に工夫と労力を放り込む毎日です。一緒に仮説をたてたり実験したり考察する毎日をすごせたら嬉しいです。





千葉 正也 Chiba Masaya

美術とは極限まで豊かな話し合いの場みたいなものだと思います。願わくば目一杯楽しんで欲しいです。



講師



諏訪 未知 Suwa Michi

身近な疑問や小さな発見から始まった制作が、自分と世界がひっくり返るような経験に変わる。その戸惑いと喜びを、共有できる友人や先生がいる。それはすごく幸せなことだと思います。

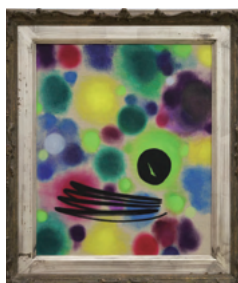


客員教授



O JUN

1982年東京藝術大学
大学院美術研究科
油画専攻修了画家。



©O JUN. Courtesy of Mizuma Art Gallery
撮影:宮島健

何を描こう、どう描こう、なぜ描くの、こんなの描いた、もう描かない。絵を描き始めてからずっと堂々巡りしています。たかが絵なんですけど、ついこのメディウムのせいにしてしまって…実は絵を描くこの僕が問題児なわけで…ともかく、あとは意地と気力と欲望で。ここまでおいで、絵のなる方へ。



蔵屋 美香 Kuraya Mika

東京国立近代美術館勤務を経て、2020年より横浜美術館館長。学部で油彩の制作を学び、大学院で美術史と芸術学を勉強しました。この経歴を生かし、制作の人こそ知っておくべき美術の歴史や理論の話をしたいと思っています。



マリア・ファラ《ルームサービス》2021年
「おかえり、ヨコハマ展」2025年 横浜美術館
撮影:加藤健



塩田 純一 Shioda Junichi

美術評論家。前新潟市美術館館長。水と土の芸術祭2018アート・ディレクター。わたしが学芸員として働き始めたのは、1979年のこと。主に現代美術の領域で展覧会をつくってきましたが、そのなかで出会った忘れがたく豊かなメッセージを伝えたい。



松浦 寿夫 Matsuura Hisao

画家・批評家
元武蔵野美術大学教授

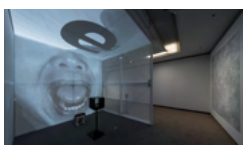


制作は生のあらゆる局面と連関しています。そして、制作も生もつねに、何らかの選択にさらされています。それがごくささやかな選択であるとしても。いくつもの選択を連鎖させることによって展開する制作において、選択されたものは、つねに選択されなかったものの対立関係を形成しています。この対立関係の大きさが強度を産出するはず。重要なことは、勇気を持って選択することだと思います。

足立 智美 Adachi Tomomi



©Guillaume Kervé /
Maison de la Poésie
de Nantes

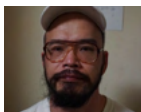


国際芸術祭「あいち2022」でのインスタレーション(2022)
©Tololo studio

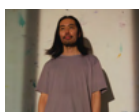
地主 麻衣子 Jinushi Maiko



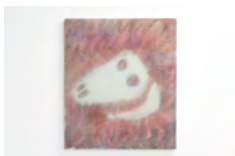
榎本 耕一 Enomoto Koichi



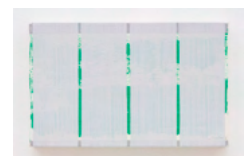
福永 大介 Fukunaga Daisuke



川角 岳大 Kawasumi Gakudai



八重樫 ゆい Yaegashi Yui



[Lying woman] / Oil on canvas / 2590mm×1940mm / 2023

中尾 拓哉 Nakao Takuya



「マルセル・デュシャンとチェス」(平凡社、2017年)

出津 京子 Idetsu Kyoko



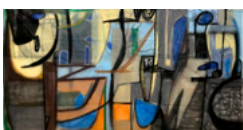
ミヤギ フトシ Miyagi Futoshi



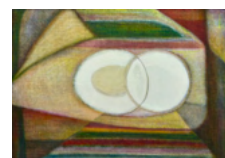
友政 麻理子 Tomomasa Mariko



小林 丈人 Kobayashi Taketo



山田 淳吉 Yamada Junkichi



工藤 麻紀子 Kudo Makiko



photo by
Kenji Takahashi



「あの時一人で楽しかった」
© Makiko Kudo, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

樹脂
井上 裕起 Inoue Yuki

映像
川添 彩 Kawazoe Aya

テンペラ
奥秋 由美 Okuaki Yumi

陶芸
原 裕子 Hara Yuko

陶芸
林 麻依子 Hayashi Maiko

銅版画
原 陽子 Hara Yoko

パフォーマンス
楊 いくみ Yang Ikumi

下地研究
坂本 龍幸 Sakamoto Tatsuyuki

卒業生の 活躍



画家

倪力(ニーリー) NILI

1994年上海生まれ。2016年上海応用技術大学 絵画専攻 卒業。
2019年多摩美術大学絵画学科油画専攻 修士課程 修了。2022年多摩美術大学博士後期課程美術研究課 修了、博士学位取得 ■[主な個展]2021年個展「DISTRACTION COLORING」(長亭ギャラリー)、2022年個展「vorhandenheit在手状態」(長亭ギャラリー) ■[主なグループ展]2018年第54回 主体展 東京都美術館 2017年グループ展 akibatamabi21 「転回する与太話」 2021年グループ展「若手の抽象絵画」(長亭ギャラリー)、2022年長亭GALLERY展(長亭ギャラリー)、2022年グループ展「Expression」(長亭ギャラリー)、2022年二人展「倪力×宋博文」(GALLERY HAYASHI)、2023年グループ展 WHAT CAFE EXHIBITION 2023 ART FAIR ASIA FUKUOKA 2023年2024年絵画の筑波賞 Tsukuba Award of Art

Q 多摩美へ進学した理由、受験期について教えてください。

A 私は学部では中国の大学で学びましたが、自分の制作における問題意識をより明確にするために、大学院への進学を決意しました。また、予備校の先輩や知人から多摩美術大学について多くの話を聞く中で、油画学科の歴史にも興味を持つようになり、受験を決めました。

Q 大学生活で得たものについて教えてください。

A 学内の先生や学生同士だけでなく、学外で活躍されているさまざまなジャンルのアーティストによる講義も多く行われており、日本の美術の「現場」に直接触れる機会が

非常に多いと感じました。一人で学ぶだけでなく、コミュニケーションを通じた学びもとても充実していました。

Q 日本に来て勉強に励む中で困ったこと、またそれをどのように乗り越えたかを教えてください。

A 日本で勉強する中で最も困難だと感じたのは、やはり日本語でした。日常的なコミュニケーションはもちろん、言葉の概念やその微妙なニュアンスの違いに伴う物事の意味の捉え方などにも、かなり苦労しました。しかし、多摩美での学びや、周囲の人々とのコミュニケーションを通して、本来気づいてなかった物事の

「本質」や、言語による思考の違いについても、より深く理解することができました。

Q ご出身である上海と日本の美術を取り巻く環境について、何か感じる差異はありますか？

A 私自身の経験では、上海にいた頃、大学の知り合いたちは主に制作技術に重きを置いていました。一方で、多摩美では周囲が表現のユニークさを重視することが当たり前のように感じられました。こうした違いを通して、現代美術における「テクニック」や「プロフェッショナル」とは何かという問いを、改めて考えるきっかけになりました。

Q 油画専攻への受験を考える人へ向けたメッセージをお願いします。

A 油画専攻は、自分のやりたいことに自由に取り組める環境だと感じています。しかし、その自由を本当に活かすためには、自分が何を感じ、何を求めているのかを、自らと真摯に向き合いながら問い続ける必要があると実感しています。

こうした訓練や実践は、美術制作にとどまらず、さまざまな面にも大きなプラスの影響を与えてくれるはずだと思います。



ウロボロス話し /
oil, vinyl, wood, cable ties / 620×750mm /
2022
<https://tsukuba-art-award.org/>



シネマティックアーティスト / マットペインター

中原 さとみ Nakahara Satomi

多摩美術大学 絵画学科 油画専攻卒業。
国内でフリーランスのジェネラリストとして実写合成やフルCG映像制作を経て、カナダのVFXプロダクションMPCにてデジタルマットペインターとしてハリウッド映画に携わる。
2020年に映像制作会社SAFEHOUSEへ、シネマティックチームのスーパーバイザーとして入社。

Q 多摩美へ進学した理由、受験期について教えてください。

A 正直に書きますと、3浪目だったこともあり私大受験を考えたときに、先に入学した人たちの話をいろいろと聞いて、自主性を大事にしてくれそうなのが多摩美だったので決めました。

Q 大学生活で得たものについて教えてください。

A 文化人類学や民俗学、映像についての授業など、大学に入らないと出会うことのない授業に刺

激を受けました。多摩美で沢山のインプットができたことは、制作だけでなく今の自分の糧になっています。

Q 今の仕事を目指すきっかけは何ですか？

1を100に持っていくことのほうが得意だったので、頼まれたものをつくる環境がいいと思ってました。アニメ業界にも興味がありましたが、当時は映画やドラマの3DCGのほうがお給料や環境が良かったのでこちらを選択しました。

Q 在学時の制作や活動は、どのような形で今のお仕事に繋がっていますか？

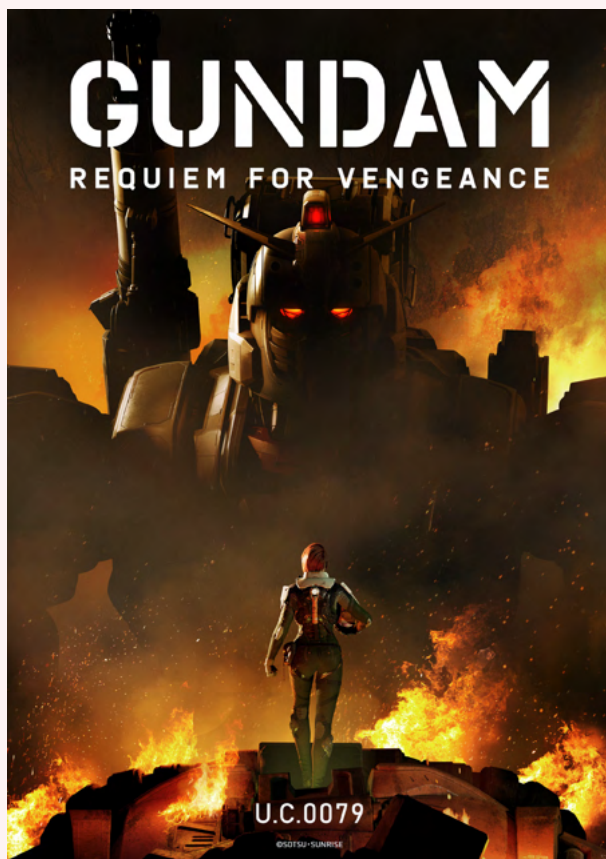
A 元々、大人数よりも一人で制作をすることが好きだったので、大学時代に展示などで他の人と協力して何かをすることが多く、そこにも面白さを感じるようになりました。いまの仕事で大切にしている、チームで作品をつくりあげるとい部分はここから繋がっていると思います。

Q 油画専攻への受験を考える人へ向けたメッセージをお願いします。

A 私はやりたいことが沢山あったので、あっちこっちに自由にやれる油画がとても合っていました。夢中になっていることをすべて受け止めてくれる環境です。ここでの経験は自分の延長線上に様々なきっかけをくれるはずです。



©Disney



©SOTSU・SUNRISE



画家

撮影: comuramai

三瓶 玲奈 Reina Mikame

愛知県出身。2015年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。2017年東京芸術大学大学院美術研究科油画修了。《色を見る》、《線を見る》と題した作品を主に、知覚とイメージの関係性を追求する絵画表現に取り組んでいる。個展や国内外のアートフェアでの作品発表のほか、書籍やカタログ、映像作品へのアートワーク等の提供や、ファッションブランドとのコラボレーションも手掛ける。主な個展に2024年「光をたどる」、2020年「色を見る」(ともにYutaka Kikutake Gallery/東京)、2017年「project N.69 三瓶玲奈」(東京オペラシティアートギャラリー)。主な作品収蔵先に愛知県美術館などがある。2024年に書籍「スタジオと絵を思考する」を出版。

Q 多摩美へ進学した理由、受験期について教えてください。

A 受験期は週に5日予備校に通いました。放課後は、予備校が始まるまでの時間にギャラリーや美術館をいくつも回る日々でした。受験勉強をしながら東京の学校見学をする機会は少なく、学校を実際に知ることも兼ねて4つの大学を受験し、唯一合格した多摩美術大学に進学しました。

Q 大学生活で得たものはどんなことですか？

A 美術に対する基礎的な知識をはじめとするさまざまなことを、先

生方だけではなく、同級生や他学年の学生からも学びました。卒業制作の期間に得た自分自身の制作のペースも、活動の大切な基盤となりました。また、学祭などでの他学科との交流も私にとってかけがえのないものでした。

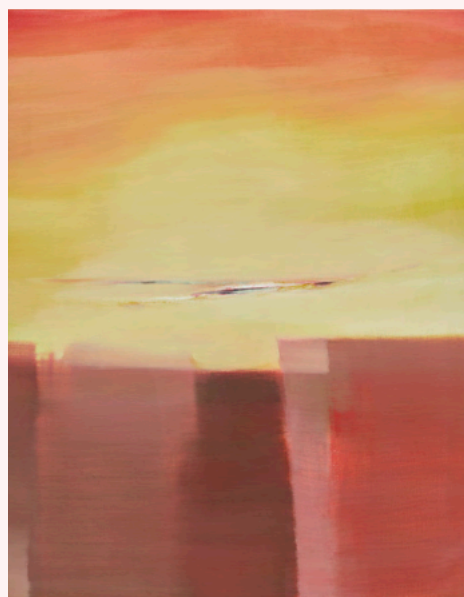
Q 卒業後に多彩な選択肢がある中、なぜ制作活動続ける道を選んだのですか？

A 制作を続ける中で、自分自身の絵を深め発展させていくには時間がいくらあっても足りないと感じました。自分の時間を絵に還元し続ける覚悟を決めたとき、あらためて明確に、画家として生きていくことを選択しました。

Q 作家活動を続ける中で感じた良かったこと、苦しかったことを教えてください。

A 良かったことは、作品を通して世界中と、そして

過去と未来ともコミュニケーションの可能性があることだと感じます。苦しかったことは、ときに自分の身体的な限界を超えて描く日々が続いたことですが、それは私にとっては幸せなことでもありました。



線を見る／キャンバスに油彩／91×72.7cm／2025／撮影: Osamu Sakamoto

Q 油画専攻への受験を考える人へ向けたメッセージをお願いします。

A 油画は柔軟な専攻で、作品制作においてのみならず、自分自身でさまざまなことを選択するための思考が育つ場だと感じます。また、受験期のように絵の技術をみっちり学べる期間は意外と少なく、その経験が何度も自分自身や周囲を助けます。その期間をむしろ楽しんで、充実した時間が過ごせることを心から願っています。



「ウインドウ」再考／キャンバスに油彩／91×91cm／2023／撮影: Osamu Sakamoto

[Up & Coming]

多摩美術大学が運営するUp & Comingは、アートの多い外苑前エリアにあります。そこは若い芸術家たちが切磋琢磨しながら、既存のシステムや権威に依存することなく自らプロデュースし、自立、成長していくための開かれた発表の場です。油画研究室もその活動を積極的に支援しています。卒業生の展覧会やシンポジウムなどを通じ、卒業後も制作や発表活動のサポートを続けます。



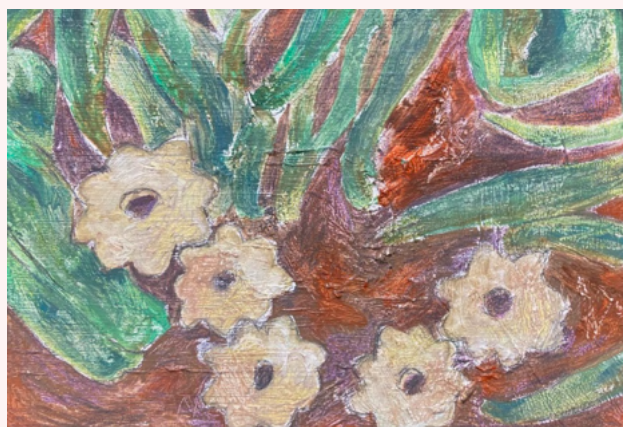


中学校美術教諭

伊深 夏海 Ibuka Natsumi

1997年 埼玉県に生まれる。

■2017年 グループ展「妖コレクション」(八王子 ajirochaya)、2018年 グループ展「美を創造する」(ギャラリーkazane)、2020年 グループ展「ていねいに生きていくんだ」(ギャラリーデザインフェスタ)、2022年 グループ展「ていねいに生きていくんだ」(ギャラリーrusu)、2022年、グループ展「つゆこおる」(ギャラリーTOWED)



「ちくわぶとピーマン」/16cm×11cm、2024

Q 多摩美へ進学した理由、受験期について教えてください。

A 自由な校風と緑豊かな部分に憧れ、進学をしました。現役時代は多摩美の他に滑り止めで美術大学を3校受けましたが、全て落ちてしまい不安な中、浪人し一浪でなんとか受かることが出来ました。

Q 大学生活で得たものについて教えてください。

A 大切な仲間を得ました。アトリエを出てから、1人で制作活動続けるのはとても心細く、不安でいっ

ぱいでした。しかし、仲間たちが展

示を行い、頑張っている姿や制作について相談し合えることで制作を続けることが出来ています。

Q 入学時から教育現場を目指していたのですか？

教育現場を目指し始めたのは大学3年生で教職の先生に出会ったことがきっかけでした。それまでの私は教員免許に対して困

った時の予防としか考えていませんでした。しかし、実際の教育現場の話や、教育に関する課題について対話を重ねていく中で危機感が芽生え教員を目指しました。

Q 在学時の制作や活動は、どのような形で今のお仕事に繋がっていますか？

作品に向き合う中で答えや方向性が分からなくなっ

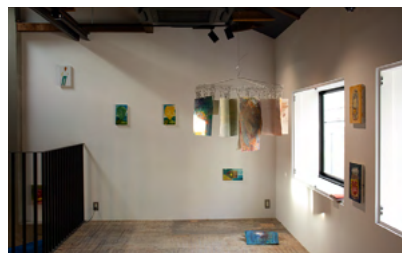
た時、生徒の作品からパワーをもらいます。また、沢山の生徒がいるので様々な視点があり、日々新しい発見ができるのも教員ならではと考えています。生徒と一緒に作品を作ったり、考えたりすることで自分の作品の輪郭も見えてきたりします。

Q 油画専攻への受験を考える人へ向けたメッセージをお願いします。

A 多摩美術大学は緑が多く、伸び伸びと制作をする環境が整っています。自由に制作する私たちが教授達も温かく見守って下さり、自分がやりたいことをめいっぱいすることが出来ます。受験をしていると方向が分からなくなることがありますが作品を作り続けることが一歩だと思えます。「成せばなる」の気持ちで私は受験期を乗り越えてきました。頑張ってください。



「ずっと使っているから」/10×10cm/2023



近年の受賞者

Idemitsu Art Award 2024 グランプリ

笹本明日香



アクセス／キャンバスに布、紙、シール、スクリーントーン、アクリルガッシュ、アクリル絵具、インク／162cm×130.3cm／2024

第2回BUG Art Award グランプリ

矢野憩啓



see-through／絵画、ドローイング、木材、布、単語帳／300cm×200cm×270cm／2024

その他の受賞者

VOCA展

[2022] ●VOCA賞受賞：川内理香子／17年大学院油画修了
[2018] ●VOCA賞受賞：碓井ゆい／04年学部卒業 ●VOCA賞受賞：幸田千依／07年学部卒業 ●佳作賞・大原美術館賞受賞受賞：青木恵美子／10年大学院修士課程修了

絹谷幸二賞

[2017] ●第九回絹谷幸二賞受賞：西村有／04年学部卒業

Idemitsu Art Award

[2023] ●榊田倫広審査員賞：夢周周／大学院在籍 ●学生特別賞：内野礼菜／大学院在籍 [2022] ●榊田倫広審査員賞：檜垣春帆／20年大学院油画修了 ●驚田めろろ審査員賞：石川ひかる／大学院在籍 ●青木恵美子審査員賞：ナカバヤシアリサ／17年油画卒業 ●学生特別賞受賞：魏嘉／19年大学院油画修了 [2021] ●ユアサエボシ審査員賞：松浦美桜香／学部在籍 ●学生特別賞：石川ひかる／大学院在籍 [2020] ●驚田めろろ審査員賞：堺大輝／大学院在籍 [2019] ●角奈緒子審査員賞：石山未来／22年油画卒業 [2018] ●島敦彦審査員賞受賞：田中良太／08年学部卒業 [2017] ●グランプリ受賞：町田帆実／18年大学院修士課程修了 ●島敦彦審査員賞受賞：末松由華利／10年学部卒業 ●橋爪彩審査員受賞：矢島智美／18年大学院修士課程修了 ●学生特別賞受賞：吉岡瞳／18年学部卒業

やまなしメディア芸術アワード2024-25

[2024] ●Y-GOLD(最優秀賞)／鈴木泰人さん(11年大学院油画修了)

CAF賞

[2021] ●保坂健二郎審査員賞：佐藤菜々栄／22年大学院油画修了
[2015] ●優秀賞受賞：村井祐希／17年学部卒業 ●優秀賞受賞：吉田実穂／15年学部卒業

岡本太郎現代美術賞

[2015年] ●特別賞受賞：村井祐希／17年学部卒業

FACE展

[2025] ●優秀賞：竹内美樹 大学院在籍／優秀賞：HUANG YUQI 大学院在籍 [2024] ●読売新聞社賞：六無／03年大学院油画修了
[2023] ●読売新聞社賞：橋口元／12年油画卒業 [2022] ●審査員特別賞：飯島ひかる／21年大学院油画修了 ●グランプリ：新藤杏子／07年大学院油画修了 ●審査員特別賞：飯島ひかる／21年大学院油画修了 [2021] ●グランプリ：魏嘉／18年大学院油画修了 ●優秀賞：町田帆実／18年大学院油画修了 [2020] ●審査員特別賞：檜垣春帆／20年大学院油画修了 [2019] ●審査員特別賞：小田瀧秀樹／86年油画卒業 [2018] ●審査員特別賞：上田葉介／88年大学院油画修了 [2017] ●グランプリ：青木恵美子／10年大学院油画修了 ●読売新聞社賞：宮岡俊夫／08年大学院油画修了 ●審査員特別賞：浜口麻里奈／11年油画卒業

おもな進路先

ゲーム・玩具キャラクター

株式会社セガ
カプコン
カミオジャパン
グランゼーラ
コナミホールディングス
サンエックス
プラチナゲームズ
任天堂
スタジオフェイク
株式会社コーエーテクモホールディングス
株式会社バンダイナムコフィルムワークス
株式会社アクアスター

インターネット ソーシャルゲーム

アソビモ
サイバーエージェント
サイバーステップ
シーエーモバイル
セガゲームス
MUGENUP
ZOZOテクノロジーズ

教育・公務員

グローバルアイ
すいどーばた美術学院
埼玉県芸術文化振興財団
警視庁
朝日カルチャーセンター
東京都公立小学校・中学校・高等学校
埼玉県公立中学校・高等学校
神奈川県公立高等学校
千葉県立公立中学校
横浜市公務員
小学館アカデミー絵画倶楽部
有限会社芸術による教育の会
特許庁
株式会社こどもスクール

所属コマーシャル ギャラリー

TOMIO KOYAMA GALLERY
Kaikai Kiki
WAITINGROOM
Yutaka Kikutake Gallery

進学・留学

多摩美術大学大学院
東京藝術大学大学院

自主運営ギャラリー

4649

造形制作 舞台美術制作

(株)Mテック
エンブレム
株式会社東宝映像美術
スタジオ三十三
シミズオクト
マリ・アート
ハミルトン株式会社
株式会社木村鋳造所

アニメーション映像

イマジカデジタルスケープ
グラフィニカ
サンライズ
ジェー・シー・スタッフ
じゃっく
十文字
テレコムスタッフ
マッドハウス
株式会社MAPPA

その他

アクア
カインズ
カレルチャベック
ケイ・ウノ
世界堂
博報堂プロダクツ
ユザワヤ商事
DNPメディア・アート
ベネッセコーポレーション
ルイ・ヴィトンサービス株式会社
レザーアート
株式会社ホビージャパン
株式会社CloverWorks
大成建設株式会社
本田技研工業株式会社
株式会社朝日新聞社
朋和産業株式会社
株式会社ブラグ
株式会社コム・デ・ギャルソン
ベネリック株式会社
株式会社JR中央線コミュニティデザイン

入試情報

油画専攻は、伝統的な価値観や美意識をも大切にしつつ、新しい時代に対応可能な、柔軟性に富んだ好奇心の旺盛な学生を望みます。現代の世界は、様々な問題を抱えています。一昨年からのコロナ渦をはじめとして地球環境や、人種問題、ジェンダーや貧富の格差、科学との新しい関係の構築等、グローバル化した世界は、社会や個人の在り方の再考と同時に、芸術における新鮮な考察をも求めています。個々に閉じこもりがちな社会ですが、芸術を通して相互のコミュニケーションの活性化を目指す積極的な学生を求めます。個々における自由が、社会や世界における自由と結びつく可能性があると考えられるような学生を求めます。

一般選抜				
	人数	科目	内容	点数
学校推薦型選抜	募集人員: 10名	[面接]	①ポートフォリオ: これまでに制作した作品の写真をA4にまとめたもの ※出願時提出	—
			②油彩2点以内: アクリル絵具使用可2024年以降に制作されたもの (50号以内)	
			③ドローイングファイル1冊: デッサン、水彩等10枚以内にまとめたもの (ファイルサイズ:B2サイズ用ファイル以内)	
一般方式	募集人員: 70名	[専門試験]	①デッサン(6時間) ②油彩(6時間) 計300点	計500点
		[学科試験]	①国語(60分) —100点 ②英語(60分) —100点 計200点	
共通テスト方式	募集人員: 50名	[専門試験]	①デッサン(6時間) ②油彩(6時間) 計400点	計500点
		[大学入学共通テスト]	国語 100点	
外国人留学生選抜	募集人員: 若干名	[専門試験]	①小論文(90分) ②油彩(5時間)	—
		[面接]	—	

※入学試験の詳細については「2026年度 学生募集要項」にてご確認ください。(内容の変更がある場合があります)

2026年度入試日程

学校推薦型選抜		外国人留学生選抜、帰国生選抜	
2025年11月22日(土) または 23日(日)		2025年12月18日(木)、19日(金)	
一般選抜(一般方式)		一般選抜(共通テストI方式)	
学科試験 2026年2月10日(火)	実技試験 2026年2月13日(金)、14日(土)	大学入学共通テスト 2026年1月17日(土)、18日(日)	実技試験 2026年2月13日(金)、14日(土)

※上記とは別に、3年次編入学選抜、大学院博士前期課程(修士課程)選抜を実施しております。
詳しくは学生募集要項をご確認ください。

交通のご案内

JR横浜線・京王相模原線 橋本駅をご利用の場合

橋本駅北口バスロータリー6番乗り場から
神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」で約8分。
現金運賃=210円/IC運賃=210円

JR八王子駅をご利用の場合

八王子駅南口バスロータリー5番乗り場から
京王バス「急行 多摩美術大学行」で約20分。
現金運賃=260円/IC運賃=260円

多摩美術大学 絵画学科 油画専攻 / 192-0394 東京都八王子市鍵水2-1723
TEL: 042-679-5620(油画研究室) / 042-676-8611(代表者番号) / Email: yuga@tamabi.ac.jp /
WEB: <https://www2.tamabi.ac.jp/yuga>
デザイン: 株式会社Werkbund / 印刷・製本: 有限会社青史堂印刷 / 発行日: 2024年7月8日



表紙面: 白間 アミーナ/shelter / ミクストメディア/可変



Tama Art University

